

人間関係を育む開発的指導に関する研究

— ピア・サポート活動におけるキャリア発達支援 —

池島徳大

(奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程)

谷口義昭

(奈良教育大学大学教育学部附属中学校)

川畑恵子

(奈良教育大学大学教育学部附属中学校)

堂上禎子

(奈良教育大学大学教育学部附属中学校)

A Case Study of Developmental Guidance to bring up the Relationship
and Career Development by Peer Support Activities

人間関係を育む開発的指導に関する研究

－ピア・サポート活動におけるキャリア発達支援－

池島徳大

(奈良教育大学大学院教育学研究科専門職学位課程)

谷口義昭

(奈良教育大学大学教育学部附属中学校)

川畑恵子

(奈良教育大学大学教育学部附属中学校)

堂上禎子

(奈良教育大学大学教育学部附属中学校)

A Case Study of Developmental Guidance to bring up the Relationship and Career Development by Peer Support Activities

Tokuhiro IKEJIMA

(School of Professional Development in Education Nara University of Education)

Yoshiaki TANIGUCHI

(Nara University of Education)

Keiko KAWAHATA

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Sadako DONOUE

(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：本研究報告は、附属中学校で実施している「奈教大生による附属中学校生徒等へのピア・サポート・トレーニング・プロジェクト」の支援活動から得られた学生の学びを紹介し、人間関係及びキャリア発達の視点から検討した。生徒に対する関わり方についてかなり学んだとの内省報告をする学生が多くみられ、一連のピア・サポート・トレーニングプログラムの導入、附属中学校でのピア・サポート活動、ケース会議によるスーパービジョン等の実施が、今後のキャリア形成に役立っているものと推察された。

キーワード：ピア・サポート Peer Support

キャリア発達 Career Development

開発的指導 Developmental Guidance

1. はじめに

奈良教育大学生（院生含む）による附属中学校生へのピア・サポート活動は、本学の事業の一つとして平成21年度から実施している。これまでに不登校生徒への支援や学習支援などに成果をあげており、将来教職を目指す本学の学生にとって、貴重な体験を得ている。

そこで、本研究報告では、これまでに実施してきたプログラムの概略を紹介し、教職を目指す本学学生のキャリア発達の視点から本プログラムが果たしてきた

役割を主に学生の反応から検討し、サポーター側の学生の意識の変化などについて報告する。

2. 附属中学校で実施している

ピア・サポート活動とは

以下に、「奈教大生による附属中学校生徒等へのピア・サポート・トレーニング・プロジェクト」として学生に提示した内容に、若干補説して示す。

(1) 附中で実施するピア・サポート活動とは

ピアとは、本来「仲間」「同輩」を意味し、ピア・サポートとは同級生間や仲間同士の相談や支援を行う活動をします。本事業では、やや斜めの関係（side long）から大学生が中学生をサポートする活動として展開し、例えば、不登校に陥っている生徒や何らかの問題を持ち始めた生徒、多感な中学生への支援を、学生と附属中学校の先生方、学校教育臨床を専門とする大学教員がチームでサポートするプロジェクトとして実施します。参加する学生には、次の3つの方向からの支援を行います。

- ① 生徒との関わり方についてのサポートトレーニングを実施し支援を行う。
- ② 生徒への実際のピア・サポート活動を行う。
- ③ 関わりの中で生じる困難点について、スーパービジョンを定期的実施し支援を行う。

(2) 具体的な活動内容

活動に入る前に、大学生（院生含む）と生徒とのマッチングを行い、附属中学校教員と教育臨床を専門とする大学教員とで協議の上決定します。具体的な支援活動としては、次の5つの支援活動を想定しています。

- ① 不登校傾向を示す生徒への支援（大学の相談室あるいは、中学校の相談室での支援、学級への支援、学校行事への同行支援、家庭訪問による支援などを行う。）
- ② クラス・学年へのなかまづくり支援を教室で行う。
- ③ 保健室来室生徒への支援を保健室で行う。
- ④ クラブ活動での支援
- ⑤ 学力補充としての学習支援。主に放課後に実施。

(3) ピア・サポート活動の目標

ピア・サポート活動の目標として下記5点を挙げています。

- ① 生徒への関わり方、人間関係の取り方などが体験活動を通して分かる。
- ② 生徒の心理・社会的発達が分かる。
- ③ 生徒を支援することの喜びを共有できる。
- ④ ピア・サポーター同士の人間関係を深め、創造的な支援活動を実施することができる。
- ⑤ 自己理解を深めることができる。

(4) 応募資格

ピア・サポート活動に関心のある学生で、専攻や回生（院生）は問いません。週1回2時間程度、1年間継続して関われる学生であること。他に、スーパービジョンとして、ケース会議を月1回程度「ピア・サポート会議」を実施します。夏季には、ピア・サポートトレーニング合宿（1泊2日）を実施します。

(5) 募集人員等

10名程度で、ボランティア謝金を支給します。

(6) 応募先

奈良教育大学附属中学校（担当：川畑恵子先生。

kawahata@nara-edu.ac.jp）に申し込むこと。

(7) 問い合わせ・連絡先

奈良教育大学大学院教育学研究科（教職大学院）
池島徳大
Tel/Fax：0742-27-9310（研究室直通）
メール：ikejima@nara-edu.ac.jp

3. ピア・サポート・プロジェクト活動の流れ

以下に、ピア・サポート・プロジェクト活動の流れを示す。

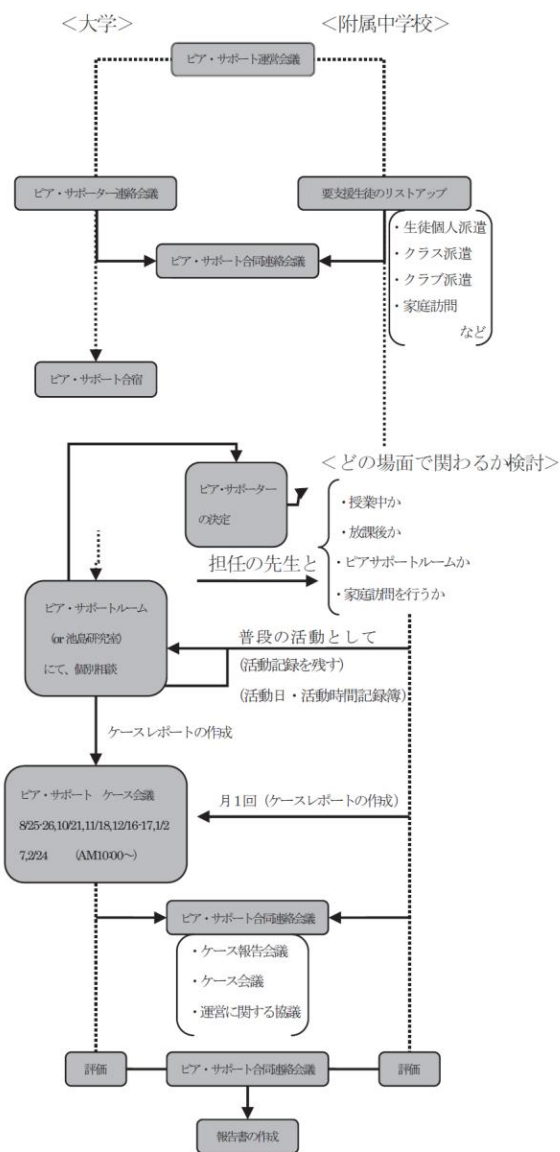


Fig. 1 ピア・サポート・プロジェクト活動の流れ

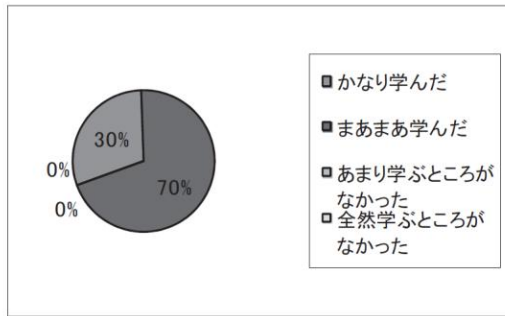
4. ピア・サポート活動、学生アンケート

本ピア・サポート・トレーニングプロジェクトは、「ピア・サポート・スキルトレーニング」「実際のピア・ピア・サポート活動」「ケース会議によるスーパー

ビジョン」の3つに分けて実施される。本研究報告では、それぞれの学びの実際を、学生アンケートから示す。

実施対象は、奈良教育大学附属中学校ピア・サポーター学生（院生含む）10名。実施日時は、X年3月である。

4. 1. ピア・サポート・スキル・トレーニング (合宿) で学んだこと

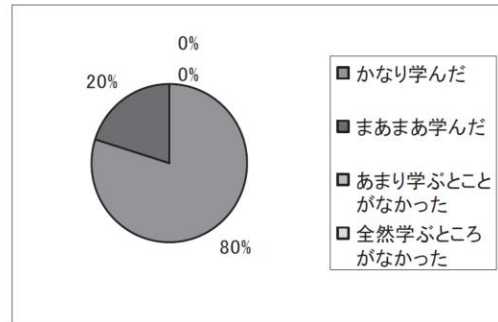


(以下 n=10)

- 私は参加した当初、カウンセリングの知識をほとんど持っておらず、子どもと接するのにもただ「子どもの目線に立って」「よく話を聞いて」「相手の気持ちを汲み取って」接すればいいだろうと単純に思っていました。カウンセリングの技法を実際に行ってみると、例えば相談を受ける側を演じることで見えてくるものもありました。いかに相手に安心感を与えるかということ、相手を受け入れていることを伝えるかということなどを学んだのだと思います。
- 話し方、聞き方など意識したことがあまりなかったので、勉強になった。子どもとの接し方を学んだ。
- 自分自身の仲間作りにもなり勉強する点が多かった。
- 人との接し方、話し方の違い、心理など多くのプログラムを実際に経験することで、自分がどう感じるか、人がどう感じるかを考えることができた。先生の対応の仕方などを見ることができたので本当に自分の為になった。このようなことは、大学の授業でも取り入れられるべきだと思う。
- 傾聴スキルなどのトレーニングはもちろん、附属中学の先生のお話など教育現場の実態を知ることができた。
- 「傾聴」すること。相談という言葉を知ると、相手に何かアドバイスや解決策を与えるというイメージがありましたが、自分と相手を対等に置き、相手の話に好奇心を持って「ただ聞く」ということで相手の心の壁を取り除くことができるというのは新鮮でした。
- 話を聞く上で注意しなくてはならないことを学べたこと。例えば、目線の向け方、うなずきなど。
- 変わらないものもあるけど、子ども達は日々変わること。

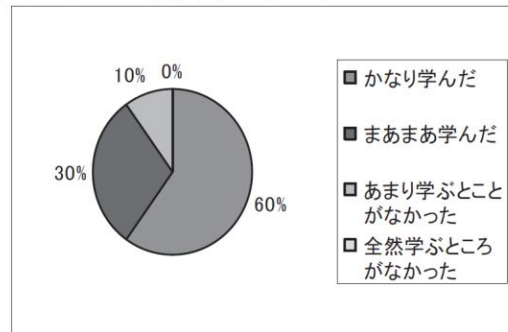
- 対立解消スキル：教師が言い聞かせるのではなく、子どもに考えさせるという視点が学べた。
- 最も学んだことは、問題解決の仕方だ。実際に自分がやってみて相手を説得できなくてどういう風にするのか解決策を見出せなかったが、池島先生が実際に実演してくださり相手が納得するとはどういうことか理解できた。

4. 2. 中学校での実践活動で学んだこと



- 現場に立つ前にあのような場を持って良かった。相手との話題づくりや対応の仕方が学べた。
- 学校現場の問題に直接触れることが出来、その対応の中で沢山勉強が出来た。
- 今の子どもの実態や保健室に来室する子どもの心境、個別での子どもとの関わり方が学べた。
- 相手の様子を見ながら、積極的に関わろうとする姿勢の大切さを学んだ。
- まず中学生との信頼関係が成り立つことが一番初めの課題だと感じた。初めにどういう風に接すればいいのかわからなかったけれども、笑顔で接していたら中学生が安心したのか話し掛けてくれるようになった。次に、生徒の要望をある程度聞いてやることである。そうすることで話を聞いてくれていると生徒は思い、いろいろ相談とかに来てくれるようになった。
- 実際に中学生と一対一で関わることはめったにないので、多くのことを学んだ。

4. 3. ケース会議で学んだこと



- ケースが結構たくさんあり、サポーターが集まって問題を共有することは大事だと思う。
- 自分とは違うケースがあり、もし受け持っている生

徒がそのような状態であるならどう対処すべきかを他の人の話を聞いて考えられたことが一番の糧になった。

- ・自分だけでは不安だったけどいろいろな状況でいろいろな人の話が聞けたし、自分は体験していないほかのサポーターの話聞くことが出来てよかった。
- ・生徒に対する心の持ちようや子どもへのアプローチの仕方のヒントなどを得た。
- ・様々なケースを聞くことによって、自分の実践にも役立てることができた。
- ・現場の先生のお話を聞く機会はあまりなかったので貴重な体験をいただきました。私たちの意見にも真剣に聞いて頂け、返答もして頂けて、とても勉強になりました。
- ・サポーターが集まって問題を共有することは大事だと思いますが、それぞれ違う個別のケースの場合共有しにくいときがあった。
- ・学生同士で直接意見交換できない場面があったことが悔やまれます。

4. 4. ピア・サポート経験を通して感じたこと

- ・これまで「不登校」についての知識はありましたが、多くのサポーターが「思っていたよりも（不登校の子どもが）普通の子どもに見える」と言っていたように、我々が持っている「しんどい子ども」のイメージとは違った子どもたちばかりでした。「学校に行けていない」ことに負い目を抱えていたり、家族との関係に悩みを抱えていたりする子どもはいましたが、学校で友だち関係から離れ保健室で安心して感じられるなど、多様な子どもがいたように思います。（ ）は筆者加筆。
- ・今、人間関係に問題を抱える子どもがとても多いと言われています。友達と付き合うために無理をする子どももいるし、仲間の輪から外されないか不安を抱え続けている子どももいると思います。もしかしたら「不登校」といった形で問題が表面化している子どもよりもっと深刻な重さを抱えた子どもが学校の中にはいるのかもしれませんが。無理をして人間関係を維持しようとする子どもは「自分」を見失っているのだと思います。特に中学生は「自分らしく」いることを恐れ、人が「自分らしく」いることを素直に受け入れることができないのだと思います。
- ・今思うことは、今回我々がしてきたサポートというのは、子どもの「自分らしさ」探しの手助けだったのではないかなと思います。
- ・生徒と関わる際、ただ悩みを聞くことのみをサポートと捉えるのは間違いだと知りました。相手とのレポートを形成し相手の人格を理解し、相手のまわりの環境を知り、すべての面においての相手を知った上で、臨まなければならないと感じました。

- ・教師として、生徒と関わることのむずかしさや、家庭の事情の複雑さに対応することの難しさを感じた。
- ・先生方も、いろいろ試行錯誤して生徒と関わっておられるのだということ。保健室に来室するような子どもは、心にしんどいと感じる部分があるのだということを学んだ。
- ・人に良い印象を持ってもらうことの大切さ、難しさ

4. 5. ピア・サポート活動で難しかったこと

- ・上辺だけではない関係を築いていくことが一番しんどかった。
- ・話をしつこく詳しく聞きすぎると嫌われちゃいそうで、浅い話しか出来なかった。
- ・ませてる子と話すこと。
- ・自分のやったことや対応のしかたが間違っているのではないかと、不安になることがたまにあり何度か悩んだ。

5. 成果と今後の課題

本プロジェクトでは、本学の大学生及び院生（以下、本学学生）がもっている援助資源（リソース）に着目し、附属中学校生徒へのピア・サポート活動を展開してきた。

附属中学校側からすれば、本中学校生徒が比較的生徒と年齢の近い本学学生から、学習面や進路面、社会面（特に友人関係）等について、いわば先輩からのサポートを得て自信を取り戻したり、また、何らかの不応傾向を示す生徒への支援を得たりすることによって、問題の改善が期待されるなどの利点がある。

また本学学生からすれば、生徒への接し方や問題行動への対応の仕方を現職の先生方や学校カウンセリングの専門家から学ぶことによって、将来の教職へのキャリア発達支援を受けることになる。しかもその学びは、単なる机上で学んだ教育諸科学の理論的枠組みを超え、生徒たちに如何に関わっていけばよいかという、極めて有益な、新鮮で重みのある実感を伴う学び合いを体験することとなる。

しかもその学びの体験は、本ピア・サポート・ト

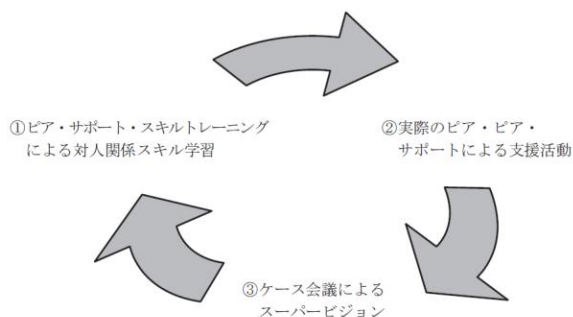


Fig. 2

ピア・サポート・プロジェクトの3つの枠組み

レーニングプロジェクトが枠組みとして示している3つの枠組み（①ピア・サポート・スキルトレーニングによる対人関係スキル学習、②実際のピア・ピア・サポートによる支援活動、③ピア・サポートケース会議によるスーパービジョンの実施）が、相互補完的に循環的に機能しているところから生まれている。（Fig. 2）

このような実体験を伴うトレーニング、実際の支援活動、スーパービジョンは、必然的に自分自身と向き合う機会をつくる。生徒と関わる機会が比較的少ない学生にとって、極めて有益なキャリア発達支援を受けられる機会になるといってよいであろう。

これらを裏付ける学生の反応として特徴的なものを見てみることにする。

まず、「ピア・サポート・スキル・トレーニング（合宿）で学んだこと」としては、「…いかに相手に安心感を与えるかということ、相手を受け入れていることを伝えるかということ」を学んだ」「先生の対応の仕方などを見ることができたので本当に自分の為になった。このようなことは、大学の授業でも取り入れられるべきだと思う」「話し方、聞き方など意識したことがあまりなかったのが、勉強になった」「話を聞く上で注意しなくてはいけないことを学べたこと。例えば、目線の向け方、うなずきなど」と述べている。

本プロジェクトで実施した人間関係形成能力を高めるピア・サポート・プログラムが、大学生にとってこの上なく新鮮であったという実態を踏まえ、今後社会人として必要な能力の育成という視点から、今後、大学教育においても大いに取り入れていくことが求められよう。

次に、「中学校での実践活動で学んだこと」として、「相手の様子を見ながら、積極的に関わろうとする姿勢の大切さを学んだ」「まず中学生との信頼関係が成り立つことが一番初めの課題だと感じた」「…次に、生徒の要望をある程度聞いてやることである。そうすることで話を聞いてくれていると生徒は思い、いろいろ相談とかに来てくれるようになった」など、生徒とのリレーションの取り方など、生徒指導上の問題への対応について学んだことを挙げ、キャリア発達に十分役立っていると思われる感想を多く述べている。特に、子どもの願い（ニーズ）の受け止めが重要であるとの気づきは、生徒理解に対する学びが非常に深い。

次に、「ケース会議で学んだこと」については、若干課題を交えて述べている。

「他のサポーターの考えや悩んでいる点などを知ることができた」「自分だけでは不安だったけどいろいろな状況でいろいろな人の話が聞けたし、自分は体験していないほかのサポーターの話を聞くことが出来てよかった」などの肯定的な反応の一方、「学生同士で直接意見交換できない場面があったことが悔やまれます」などの、進め方について要望も見られた。発表ケー

スが多く、時間的制約で十分なフリートークをする時間がなかったことなどが要因としてあげられる。

次に、「ピア・サポート経験を通して感じたこと」として、特に不登校の子どもに対する経験が大きな気づきをもたらしたと言える。それは、「多くのサポーターが思っていたよりも（不登校の子どもが）普通の子どもに見えると言っていたように、我々が持っている『しんどい子ども』のイメージとは違った子どもたちばかりでした」という感想である。学生たちは、学校へ行かない不登校生徒は悪い子どもでもある、というイメージを不登校生徒と関わるなかで払拭し、視点を広げていることが分かる。不登校の子どもにはその子なりの苦悩があるのである。発達援助の姿勢が体験を通して芽生えてきているといえる。

最後に、今後の課題をまとめておく。

- ① 学生の感想にあるように、ケース会議において、取り上げるケースが毎回多かつたために、時間的制約から現職教師や専門家を中心となって進めてしまった。今後、サポート学生が主体となって中学生との関わりをなかで得たことを主体的に自由に話し合い、学生がもつ援助資源（リソース）を有効に活用しながら、相互にスーパービジョンができる「集団スーパービジョン」の実施を検討する。
- ② 最近特に、ピア・サポーター学生だけでは対応しきれない問題が増え、それに伴い教員、大学教員間で協議すべき事案が増えた。何よりも附中の先生方の負担は相当なものが見られるため効率的な運営が課題である。
- ③ 今後、「予防」に視点をのこした、ピア・サポート活動本来の活動にシフトして行く必要がある。具体的には、今年度、生徒会及び各学級の代表・副代表全員が集まり、生徒会活動として中学生自らが主体となって、ピア・サポート活動が動き出している。今後の自発的な活動を促す支援活動をさらに検討していく。
- ④ 現在、本学の学生が県・市等にボランティアとして派遣されているが、中には学校現場での対応に苦慮している学生も多いと聞く。本報告で学生に対して行っているピア・サポート・トレーニングやスーパービジョンをボランティアとして派遣されている他の学生にも実施していくことができるかどうか検討課題である。

大学におけるキャリア発達支援は、学生の生涯にわたる「自立・自律した学習者（Empowering Learner/self-directed learner）の育成」（川嶋2006）をめざすものであるとされる。本プロジェクトにおいても、さらにこの視点から附属中学校とのプロジェクト研究を進めていきたい。

参考文献

川嶋太津夫 2006 日本私立大学協会附置私学高等教育研究所公開講座（2006.11.02）スライドより抜粋（上西充子編著、伊藤文男・小玉小百合・川喜多喬共著
2007 大学のキャリア支援－実践事例と省察－ 経営書院)